

## 新ストア主義の国家哲学

—ユストゥス・リプシウスと初期近代ヨーロッパ—

山 内 進

この論文は、初期近代ヨーロッパひいては近代ヨーロッパの人間と国家の、或る独特の在り方を探るために書かれたものである。私はそのために、16世紀に活躍した思想家ユストゥス・リプシウス Justus Lipsius (1547—1606) の国家哲学を考察の主要な対象とした。なぜなら、この人物は、今日その名を殆ど忘れられているが、ヨーロッパ初期近代においては最も著名で最も影響力をもち、おそらくある意味で最も近代ヨーロッパ的な人間と国家の哲学を描き出しているからである。

### 序論 初期近代における人間の精神構造と国家構造

人間の精神構造と国家構造とは或る内的な結びつきをもっている。ホッブズの国家哲学者としての偉大さは、何よりもこの点を鋭く認識し、情念に突き動かされる人間を出発点として強大な国家（リヴァイアサン）を構成せんとしたところにある。しかし、彼は、国家設立後にその諸々の情念がどう処理されるかについては全く言及していない。万人の万人に対する戦いを生み出すほどの諸情念は果たしてどうなるのであろうか。この点について、社会学者ノルベルト・エリアスは極めて興味深い指摘を行っている。すなわち、「人間の情念の制御の構造」と「社会全体の長期的構造変化」とは固く結びついており、情念は近代的国家構造の下で言わば自己制御される、と。彼はその流れを「文明化の過程」と呼ぶ。

エリアス著『文明化の過程』によれば、中世ヨーロッパにおいては、人々はしばしば情念の激しい爆発に突き動かされていた。例えば、彼らに「人生の喜び」を与えるものは、「攻撃欲」の発散であった。したがって、戦いは何も貴族だけのものではなかった。市民、貧民、牧人ですら「直ちに短刀を手にしたのである。」これを妨げるものは何もなかった。ただ、「十分強力な中央権力」の出現だけがそれを可能にした。その結果、

ようやく、ある程度の抑制、人間相互の顧慮が日常生活の中に浸透し始める。人々は情念の自己抑制へと向かい、その精神構造を新しい国家構造に合わせようとする。つまり、「衝動生活や自己の行動を……持続的に均質的に規則づけるという意味での心の状態の「変革」が始まる。

ヨーロッパ中世は近代とは異なった国家構造を有していた。そこでは自立的な権力が多数存在し、それら相互もしくは最高権力に対する武力による争い（フェーデ）も合法的と考えられていた。諸々の争いは、「中世においては、それが武力によってなされる限り、例外なくフェーデの形をとって行われた。暴力の行使は中世国家の際立った特色である。」（オット・ブルナー）しかし、近代においては「正当な物的暴力性」（マックス・ヴェーバー）を独占するのはただ国家だけである。人々は、その下ではもはや「攻撃欲」をあからさまに示さず、情念を自ら抑圧し、理性的に振まおうとする。

ドイツの歴史家ゲルハルト・エストライヒはこの近代の人間＝国家形成の過程をより適切に社会的紀律化と呼んでいる。しかも彼は、エリアスが注目しなかった精神的インパクトの存在をも指摘した。それが新ストア主義である。新ストア主義は、中世の人間と国家が解体しつつある時代の中にあって、新しい近代的な人間＝国家像をさし示すことによって時代を風靡する哲学となった。この新ストア主義の思想構造をその代表的著作家ユストゥス・リブシウスのうちに探るのが本論稿の直接的課題である。

## 第一部 ユストゥス・リブシウス

### 第一章 ユストゥス・リブシウスと初期近代における新ストア主義の拡大

リブシウスは、初期近代を代表する多面的な知性だった。彼はまず文献学者としてタキトゥスの改版に成功し、歴史意識の革新をもたらした。彼はまた、モンテーニュやベーコンとともに反キケロ的修辞学を確立する。それは、言葉よりも事実を重んずる経験・合理主義的立場と結びついた。リブシウスはまた哲学者だった。彼はストア哲学を復興し、『恒心論』によって新ストア主義の先駆者となる。作品は直ちに版を重ね、16・7世紀を代表するベストセラーとなった。そして、彼はこの人間学的基礎に基づいて、新しい政治学＝国家哲学を生み出す。彼のもう一つの主著『政治学』は何度も版を重ね、多数の近代語に訳出された。この著作が、ヨーロッパにおける……この人文主義者の非常に広範に及ぶ名声の源泉となったのである。」（ブリュエアー）

リブシウスはモンテーニュ等の当時の知識人たちと深い親交をもち、汎ヨーロッパ的

な「学識の国」の中心人物であった。しかも、彼は政治家や外交官とも直接、間接に接触をもった。オランダのオルデンバルネフェルトやマウリッツ公、フランスのアンリ四世とその大臣たちそしてリシュリュー、スウェーデンのグスタフ・アドルフと彼の宰相、バイエルンのマクシミリアン一世、さらにブランデンブルク・プロイセンの大選帝侯とその高官たちはいずれも新ストア主義に深い関心を示し、またその影響を強く受けているように思われる。

しかし、にも拘らず、彼の名と彼の仕事は今日ほとんど忘れ去られている。リブシウスとはいかなる人物であり、どのような思想を初期近代ヨーロッパにもたらしたのであろうか。

## 第二章 リブシウスの生涯と時代

リブシウスは1547年ベルギーのある町の名家に生まれ、ルーヴェン大学で古典学を学んだ。1572年ルター派の大学イェーナに教授職を得るが、二年ほどでこの地を去る。ルター教徒へと改宗したにもかかわらず、宗教的問題で不信を抱かれ続けたためらしい。

1574年ケルンでタキトゥスの諸著作の改訂版を公にし、全ヨーロッパに名声を得る。1576年、彼は母校ルーヴェン大学の教授となる。しかし、スペイン軍のジャンプルーでの勝利を前にして、彼はルーヴェンを去った。かつてルター教徒であると公言した者が市にとどまるのは危険だったからである。1579年、彼は新生のレイデン大学教授となる。彼はそこで『恒心論』と『政治学』を著し、学究生活の頂点に立つ。しかし、彼は孤独だった。彼はレイデンでカルヴァン主義者となったにもかかわらず、宗教的問題で不安の日々を過ごした。それ故、『政治学』の宗教に関わる叙述をコールンヘルトに攻撃されたのを機として、彼はついにレイデンを去った。慎重な交渉の後に、彼は再びルーヴェン大学の教授として祖国へ戻った。敬虔なカトリックとして、彼は最後の教授・研究活動に励み、1606年59歳でその生涯を終える。

## 第二部 新ストア主義の倫理と合理主義

### 第一章 情念と理性

17世紀前半のヨーロッパでは、「恒心」という言葉がいたるところに見られる。ヴェルツィヒによれば、これはバロックの精神を端的に伝える、言わば時代の徴表であった。そして、この概念が普及するのに与って力があつたがリブシウスの『恒心論』である。

『恒心論』は、スコラの形而上学に対峙し、戦争や内乱の下にあった人々に対する

「救い」、「生の最も真剣な手だて」として記された。彼は「公の不幸に対する救い」のために「恒心」の重要性を訴えたのである。

「恒心」とは、「外的なものや偶然的なものによって高められたり、沈められたりすることのない、精神の正しかつ揺ぎない強さ」である。これは、人間を様々な情念に捉われないようにするための徳であり、その意味での精神の強さである。この精神の強さは、「臆見ではなく、判断力および正しい理性に基づく、精神に備わった堅固さ」でもある。そして、「正しい理性」とは、「人的なことがらと（我々と関わる限りでの）神的事実なことがらについての正しい判断および知覚以外のなにものでもない。」それ故、「恒心」とは単に精神の安定だけを意味するのではない。むしろ、それは、欲望や喜び、恐怖や悲嘆を抑えて的確に判断し、忍耐強く行動するための強い精神力を意味する。外的な様々の事象に対していたずらに情念に捉われず、心を鎮め、理性的かつ的確に行動すること、これが情念を抑圧する真の目的であり、また「恒心」の狙いである。

## 第二章 哲学的合理主義から政治的合理主義へ

新ストア主義は、宗教との関係では理神論的立場をとる。すなわち、それは神を唯一の絶対的創造神とするが、神の役割をあくまでそれだけにとどめる。リブシウスはその創造神を彼岸にとどめつつ、この世のことを人間理性の支配に委ねようとする。そのために、「摂理」、「必然」、「運命」が語られる。

「摂理」は神の配慮であり、宇宙の森羅万象を統べる。しかし、この「摂理」はあくまで神の下にとどまり、宇宙の直接的支配は「必然」に委ねられる。「必然」とは、「摂理の確固とした強制力であり、不変の力である。」この「必然」には「自然的摂理」と「運命的必然」がある。「自然的必然」とはすべてのものはいつか必ず滅亡するというものだが、「運命的必然」とは事件や人間の行動を規定する「運命」の必然である。

リブシウスは「真の運命」を「摂理の永遠の決定」と呼ぶ。しかし、これは「運命」と「摂理」を同一視するものではない。「摂理は神の内部にあり、神にのみ帰せられる。運命は事物の中であって、事物に帰せられる」からである。神は彼岸にとどまり、この世のことは「運命」の定めによる。しかも、この運命は地上ではあくまで第一因であって、人間の自由意志をも含む中間因・第二因を排除しない。人間は自由意志をもち、自己の判断で行為し、運命に従う。「人間を駆り立てるものは神でも、隣切した力でも、内的力でもなく、自分自身なのである。」それ故、人はその自分自身の力で運命と合体しなければならない。運命とは「結果としての必然」であって、その結果を生み出すの

は自由意志を有する人間だからである。なぜなら、「必然と運命の厳しい法則が課するすべてに耐えるのは、低能であって服従ではない」からである。ボルケナウが言うように、「恒心」においては「無感動」ということだけが重要なのである。つまり「恒心」ということが表明されるのは、どんな感動的な拘束も行動の事実適合性（ザッハリッヒカイト）をそこなうものではない、という点においてである。意志の自由は本来この点にある。

（『封建的世界像から市民的世界像へ』）

『恒心論』の人間＝世界観を貫くのは、実は政治的合理主義である。感動に動かされない、理性的な人間と世界がその理想である。したがって、新ストア主義は、無秩序な暴力と情念のばっこする世界を秩序ある理性的なものに変革せんとする。それは、人間を情念の虜から理性的戦士へと変え、次いで国家をアナーキーな分散的権力構造体から紀律化され合理化された権威的秩序へと改造せんとする。リブシウスはその見取図を『政治学』で描き出すことになる。

### 第三部 新ストア主義の国家思想

#### 第一章 ラムス主義とリブシウスの『政治学』

リブシウスの『政治学』は16・7世紀のベストセラーであった。それは時代の要請に方法の上でも内容の面でも最も良く適合していた。それは、まず何よりも反キケロ的な革新的文体とその表現方法であるアフォーリズムを取っていた。さらにそれは、当時最も先進的で破壊的な、ラムスの論理学を採用していた。『政治学』はラムスの二分法によって記述され、そのために非常に先駆的な装を有した。「政治学は方法的となり、より狭い意味での政治科学が生まれた。その近代教科書、政治行動の理論、統治理論および統政技術の教本がリブシウスの『政治学』だったのである。」（ギュンター・アーベル）

#### 第二章 国家理性

『政治学』は、初期近代における政治的合理主義の先駆的表現である。これは、なるほど依然として中世的国家目的である「公共善」を最高善とするが、彼の「公共善」はもはや旧ヨーロッパ的な共通善の要素を含まない。つまり、それは「人間的生存の条件としての、共通の、すべての人間に関わる安寧」ではなく、「国民の安寧もしくは政治制度としての国家の安寧」を意味した。リブシウスは公共善を国家的安全と等置し、何よりも国家全体の安寧を優先した。彼は個人的情念の発現を規制し、理性的な公共つま

り公的秩序を維持することを重視する。命令・服従の秩序の形成と維持が最優先の課題となる。そのための「必要」は道徳をも破る。「必要は……すべての法律を破る。」(セネカ) この意味において、リブシウスは国家理性の理念の信奉者であった。

### 第三章 宗教的寛容—政治的叡知 (1)

初期近代ヨーロッパの主要問題の一つは宗教であり、宗派的あつれきであった。『政治学』は、宗教戦争という「不和のたいまつ」が燃え盛るのを前にして、その解決方法を示す。その解答とは、君主に宗教の内容そのものへの介入を認めないが外的な監督を認める、というものである。したがって、彼は信教の自由を認めない。彼の考えでは、それはむしろ混乱の源泉でしかないからである。しかし、彼は寛容の徒であった。なぜなら、彼は、国教に従わない者たちを「公に誤る人々」と「私的に誤る人々」とに分け、「騒乱を起こす」前者だけを罰し、後者を放置するように主張したからである。彼にとって重要なのは教義そのものではない。合理的な秩序、合理的な命令・服従の秩序を完成することだった。そのために彼は宗教的情念の突出を抑制しつつ、しかも私的な次元では信仰を自由に委せた。これは、すべての信仰に無差別の自由を与えはしないが、私的に信じ静かにしていることを許した。むしろ、合理的秩序を形成するためである。リブシウスの宗教的寛容は政治的叡知の一分岐なのである。

### 第四章 権威的支配—政治的叡知 (2)

新ストア主義の基本的倫理は「恒心」・「忍耐」・「服従」である。この倫理が新ストア主義の国家、「確たる命令・服従の秩序」を内面的に支える。新ストア主義においては理性が情念を支配する。したがって、国家においても理性的支配者が情念に捉われた民衆を支配し、紀律化しなければならない。リブシウスはそれ故、支配者に民衆の情念を規制・操作するように求める。支配者が留意すべきは、民衆に「好意」と「権威」の情念を抱かせ、「憎悪」と「軽蔑」の情念を持たせないようにすることである。彼はとりわけ、「国王とその地位に関して、臣民さらに外国人が感ずる尊敬の念」である「権威」を重視し、その必要性を強調する。「まさに権威に依らないで誰が統治できるであろうか。『統治する力は服従する者の同意のうちに存する』(リヴィウス)」と。さらに彼は、「権威」と反対の情念、「国王とその地位に対する、臣民の強硬な害意および立腹」である「憎悪」についても詳論し、それを避けるように勧める。とくに、「憎悪」を招きやすいが非常に大切な、租税と監察＝風紀の取締に論及し、初期近代国家に特有の学問、官房学と行政学(ポリツァイ)の先駆を為す。彼は、戦争ひいては国家のために

租税が必要であることを説き、国家の管理のために民衆を監察することを求めた。彼はそうすることによって民衆の紀律化を求めたのである。

### 第五章 官僚制

新ストア主義の紀律化は、ただ民衆に対してのみ求められるわけではない。『恒心論』は広い意味における統治者層に自己紀律を求めている。そして、『政治学』は人間の紀律化とともに制度の紀律化を要請した。すなわち、官僚機構と軍事機構の紀律化を要請したのである。

官僚機構について、リプシウスは参議官と行政官とを厳密に分けた。参議官は君主の顧問であり、君主を知的に支える。そして参議官はあくまで公的な存在でなくてはならない。「宮廷の召使いの秘密の助言」は退けられる。「彼らは私事に関して君主に仕える者であって、国家の職務に従事しているのでも、国事に携わっているのでもない。「同様に、行政官も公的に君主を手足となるそれと私的に君主に仕える宮内官とに分かれる。リプシウスがとりたてて問題にするのは、「支配もしくは国家の事柄に部分的に関わる」公的行政官であり、その最重要の規則を「服従」のうちにみる。彼らは君主に服従し、「国家と国民のために」働く。ここにみられるのは、「官僚の精神の原型」すなわち、「服従、定型、形式主義、非情、……メカニクな勤務の精神」(ヒンツェ)である。

### 第六章 常備軍—軍事的叙知 (1)

新ストア的な紀律化の理念は軍事の分野にも及ぶ。封建的軍事体制が無力化していた16世紀には、傭兵隊が軍事力の中核をなしていた。しかし、傭兵は不誠実で、不服従、国民に対して危険である。リプシウスはこの観点から、傭兵に代って国民軍の創設を求めた。彼は、古代ローマ軍を範として紀律正しい国民軍を形成せんとしたのである。そのための手段は二つある。選抜と紀律である。

選抜は兵士を「臣民から選抜すること」である。これはまた正規兵と予備兵について行われる。この正規兵こそ、「常備軍 *miles perpetuus*」として初期近代国家の軍事力の中核を構成するものである。さらに、臣民から成る「兵士を強くしかも有徳な者へと厳しく鍛えあげる」ために紀律が要請された。紀律は訓練、秩序、抑制、模範からなる。兵士は、この紀律によって、かつての無頼の徒から新ストア的な倫理を有する真の服従者となる。暴虐と逃亡に長けた傭兵から、死への恐怖すら克服する兵士、黙して服従し、命令に従って機動的に行動する兵士となる。この兵士を的確に動かすのは理性的に判断・命令する指揮官、恒心を有する指揮官である。全軍隊がここに機構化され、組織的に

戦いが貫徹される。君主、官僚、軍隊が、「義務の遂行、克己、節度、節制、敬虔というストア的な命令、さらにまた『恒心』という戦闘的なモラル、その生のエネルギーと精神の強さ、要するに倫理によると同時に理性に統御された躍動的力」(エストライヒ)は体现することになった。軍事の問題は軍事の領域を越えて、国家の問題となる。軍事は国家化し、国家もまた軍事化する。

#### 第七章 戦争と平和—軍事的叡知(2)

新ストア主義の国家目的は「公共善」であり、統治とは「命令・服従の秩序」を意味した。したがって、「公共善」が国家的安全と同義である限り、国家的軍隊の目的はあくまで平和にある。しかし、組織化され規律化された軍隊を擁する国家は、実力による平和を求める。「『平和を享受しようと思むなら、戦争を行わなくてはならない。』(ケケロ)」さもなければ、「何かつまらない動物のようなもの」とみなされてしまうであろう。それ故、新ストア主義の国家は対内的に規律化され、対外的に自己主張する存在である。それはまた制度的に強力であるだけでなく、臣民の情念を合理的に管理し、彼らを戦争へと駆り立てる。黙して命令に服すること、これこそ新ストア的な倫理であり、真に男性的な徳である。国家は、ここに強大な権力構造とそれに見合った精神構造=新ストアの人間を獲得する。新ストア主義において、国家は強力な権力と軍事力、さらにその双方に内面的に従い、戦うことを辞さない人間集団を有する、マルスのリヴァイアサンとなったのである。

#### 結び 合理的規律化と初期近代ヨーロッパ

イギリスの歴史家マイケル・ロバーツによれば、初期近代に始まるある歴史現象が近代ヨーロッパの進路を運命的に定めたという。それはヨーロッパ全域で展開された軍制改革であり、その重要性の故に軍事革命と呼ばれる。この革命は、オラニエのマウリッツを中心とするオランダ共和国軍の軍制改革とともに始まる。その主要な特徴は高度の規律であり、それを前提とした精密な軍隊運動であった。この点に、軍事革命と新ストア主義の接点がある。マウリッツ等の改革の推進者たちは主に古典に依拠してこれを推進したが、その中にリブシウスの著作も存在したからである。彼らは厳しい訓練を恒常的に兵士に施したが、その背景には新ストア的な規律の理念が存した。そして、この改革は直ちにスウェーデン、ドイツ、フランス、イギリス等ヨーロッパ全域に広まった。

しかし、軍事革命は初期近代ヨーロッパにおける全体的構造変化の一関数にすぎない。マックス・ウェーバーによれば、近代的戦闘に「最初に転換をもたらしたのは火薬ではなく、紀律だった。」そして、この「軍事的紀律」が「近代資本主義的工場の理想的モデル」となった。政治・経済的要請の合理化と紀律化は歩を同じくして進む。「諸々の個人的行為を退ける、あのありとあらゆる力の中で最も抗し難いのは、個人的カリスマや身分的名誉に立脚地をもつ立場を或いは根絶するか、或いは合理的に改造する力、つまり合理的紀律である。」(ウェーバー)

新ストア主義は、情念に囚われず理性に従う人間、服従し耐えることのできる人間と命令・服従の秩序としての国家、対外的に力によって自己主張し得る国家の青写真を提供した。それ故に、新ストア主義は、初期近代ヨーロッパの下で始まりつつあった、人間と国家の紀律化を推進した。新ストア主義とりわけその国家哲学は、近代ヨーロッパを準備する一礎石となったのである。

### 〔博士論文審査要旨〕

#### 論題 新ストア主義の国家哲学

——ユストゥス・リプシウスと初期近代ヨーロッパ——

論文審査担当者 勝 田 有 恒  
上 原 行 雄  
堀 部 政 男

#### 1. 本論文の概要

この論文(332頁)で著者山内進氏は、初期近代ヨーロッパひいては近代ヨーロッパ国家における人間と国家のある独特な在り方について、16世紀の人文主義者であり新ストア主義者でもあったレイデンのユストゥス・リプシウス Justus Lipsius (1547—1606)の国家哲学の綿密な分析を通して探究しようと試みている。

この人物は、ごく最近まで殆ど忘れられているものの、ヨーロッパ初期近代においては、夙にその名を知られ、その一連の著作は当時の支配者層の間で流布し、いわば洛陽

の紙価を貴からしめたことがあった。著者はリブシウスの国家哲学の影響力によって新ストア主義がヨーロッパ近代国家の形成に際して、その内面を支える重要な要素となったことを精神史の面から明らかにしようとしている。

まず、本論文の構成を示せば、次のとおりである。

序 論 初期近代における人間の精神と国家構造

第一部 ユストゥス・リブシウス

第一章 ユストゥス・リブシウスと初期近代における新ストア主義の拡大

第二章 リブシウスの生涯と時代

第二部 新ストア主義の倫理と合理主義

第一章 情念と理性

第二章 哲学的合理主義から政治的合理主義へ

第三部 新ストア主義の国家思想

第一章 ラムス主義とリブシウスの『政治学』

第二章 国家理性

第三章 宗教的寛容—政治的叡知（一）

第四章 権威的支配—政治的叡知（二）

第五章 官僚制

第六章 常備軍—軍事的叡知（1）

第七章 戦争と平和—軍事的叡知（2）

結 び 合理的紀律化と初期近代ヨーロッパ

序論 初期近代における人間の精神構造と国家構造

人間の精神構造と国家構造とは或る内的な結びつきをもっている。ホッブスの国家哲学者としての偉大さは、何よりもこの点を鋭く認識し、情念に突き動かされる人間を出発点として強大な国家（リヴァイアサン）を構成せんとしたところにある。しかし、彼は、国家設立後にその諸々の情念がどう処理されるかについては全く言及していない。万人の万人に対する戦いを生み出すほどの諸情念は果たしてどうなるのであろうか。この点について、社会学者ノルベルト・エリアスは極めて興味深い指摘を行っている。すなわち、「人間の情念の制御の構造」と「社会全体の長期的構造変化」とは固く結びついており、情念は近代的国家構造の下で言わば自己制御される、と。彼はその流れを

「文明化の過程」と呼ぶ。

エリ阿斯著『文明化の過程』によれば、中世ヨーロッパにおいては、人々はしばしば情念の激しい爆発に突き動かされていた。例えば、彼らに「人生の喜び」を与えるものは、「攻撃欲」の発散であった。したがって、戦いは何も貴族だけのものではなかった。市民、貧民、牧人ですら「直ちに短刀を手にしたのである。」これを防げるものは何もなかった。ただ、「十分強力な中央権力」の出現だけがそれを可能にした。その結果、「ようやく、ある程度の抑制、人間相互の顧慮が日常生活の中に浸透し始める。」人々は情念の自己抑制へと向かい、その精神構造を新しい国家構造に合わせようとする。つまり、「衝動生活や自己の行動を……持続的に均質的に規則づけるという意味での心の状態の変革」が始まる。

ヨーロッパ中世は近代とは異なった国家構造を有していた。そこでは自立的な権力が多数存在し、それら相互もしくは最高権力に対する武力による争い（フェーデ）も当然のことと考えられていた。諸々の争いは、「中世においては、それが武力によってなされる限り、例外なくフェーデの形をとって行われた。暴力の行使は中世国家の際立った特色である。」（オットー・ブルナー）しかし、近代においては「正当な物的暴力性」（マックス・ウェーバー）を独占するのはただ国家だけである。人々は、その下ではもはや「攻撃欲」をあからさまに示さず、情念を自ら抑圧し、理性的に振まおうとする。

ドイツの歴史家ゲルハルト・エストライヒはこの近代人間＝国家形成の過程をより適切に社会的規律化と呼んでいる。しかも彼は、エリ阿斯が注目しなかった精神的インバクトの存在をも指摘した。それが新ストア主義である。新ストア主義は、中世の人間と国家が解体しつつある時代の中にあって、新しい近代的な人間＝国家像をさし示すことによって時代を風靡する哲学となった。この新ストア主義の思想構造をその代表的著作家ユストゥス・リブシウスのうちに探るのが本論稿の直接的課題である。

## 第一部 ユストゥス・リブシウス

### 第一章 ユストゥス・リブシウスと初期近代における新ストア主義の拡大

リブシウスは、初期近代を代表する多面的な知性だった。彼はまず文献学者としてタキトゥスの改版に成功し、歴史意識の革新をもたらした。彼はまた、モンテーニュやベーコンとともに反キケロの修辞学を確立する。それは、言葉よりも事実を重んずる経験・合理主義的立場と結びついた。リブシウスはまた哲学者だった。彼はストア哲学を

復興し、『恒心論』によって新ストア主義の先駆者となる。作品は直ちに版を重ね、16・7世紀を代表するベストセラーとなった。そして、彼はこの人間学的基礎に基づいて、新しい政治学国家哲学を生み出す。彼のもう一つの主著『政治学』は何度も版を重ね、多数の近代語に訳出された。「この著作が、ヨーロッパにおける……この人文主義者の非常に広範に及ぶ名声の源泉となったのである。」(ブリューアー)

リブシウスはモンテーニュ等の当時の知識人たちと深い親交をもち、汎ヨーロッパ的な「学識の国」の中心人物であった。しかも彼は政治家や外交官とも直接、間接に接触をもった。オランダのオルデンバルネフェルトやマウリッツ公、フランスのアンリ四世とその大臣たち、そしてリシュリュー、スウェーデンのグスタフ・アドルフと彼の宰相、バイエルンのマクシミリアン一世、さらにブランデンブルク・プロイセンの大選帝侯とその高官たちはいずれも新ストア主義に深い関心を示し、またその影響を強く受けているように思われる。

しかし、にも拘らず、彼の名と彼の仕事は今日ほとんど忘れ去られている。リブシウスとはいかなる人物であり、どのような思想を初期近代ヨーロッパにもたらしたのであるうか。

## 第二章 リブシウスの生涯と時代

リブシウスは1547年ベルギーのある町の名家に生まれ、ルーヴァン大学で古典学を学んだ。1572年ルター派の大学イエーナに教授職を得るが、二年ほどでこの地を去る。ルター教徒へと改宗したにもかかわらず、宗教的問題で不信を抱かれ続けたためらしい。

1574年ケルンでタキトゥスの諸著作の改訂版を公にし、全ヨーロッパに名声を得る。1576年、彼は母校ルーヴァン大学の教授となる。しかし、スペイン軍のジャンブルーでの勝利を前にして、彼はルーヴァンを去ったかつてルター教徒であると公言した者が市にとどまるのは危険だったからである。1579年、彼は新生のレイデン大学教授となる。彼はそこで『恒心論』と『政治学』を著し、学究生活の頂点に立つ。しかし、彼は孤独だった。彼はレイデンでカルヴァン主義者となったにもかかわらず、宗教的問題で不安の日々を過ごした。それ故、『政治学』の宗教に関わる叙述をコールヘルトに攻撃されたのを機として、彼はついにレイデンを去った。慎重な交渉の後に、彼は再びルーヴァン大学の教授として祖国へ戻った。敬虔なカトリックとして、彼は最後の教授・研究活動に励み、1606年50歳でその生涯を終える。

## 第二部 新ストア主義の倫理と合理主義

### 第一章 情念と理性

17世紀前半のヨーロッパでは、「恒心」という言葉がいたるところに見られる。ヴェルツィヒによれば、これはバロックの精神を端的に伝える、言わば時代の徴表であった。そして、この概念が普及するのに与って力があつたのがリブシウスの『恒心論』である。

『恒心論』は、スコラの形而上学に反対し、戦争や内乱の下にあつた人々に対する「救い」、「生も最も真剣な手だて」として記された。彼は「公の不幸に対する救い」のために「恒心」の重要性を訴えたのである。

「恒心」とは、「外的なものや偶然的なものによって高められたり、沈められたりするものがない、精神の正しくかつ揺ぎない強さ」である。これは、人間を様々な情念に捉われなくするための徳であり、その意味での精神の強さである。この精神の強さは、「臆見ではなく、判断力および正しい理性に基づく、精神に備わつた堅固さ」でもある。そして、「正しい理性」とは、「人的なことがらと（我々と関わる限りでの）神的なことがらについての正しい判断および知覚以外のなものでもない。」それ故、「恒心」とは単に精神の安定だけを意味するのではない。むしろ、それは、欲望や喜び、恐怖や悲嘆を抑えて的確に判断し、忍耐強く行動するための強い精神力を意味する。外的な様々の事象に対してはつづらに情念に捉われず、心を鎮め、理性的かつ的確に行動すること、これが情念を抑制する真の目的であり、また「恒心」の狙いである。

### 第二章 哲学的合理主義から政治的合理主義へ

新ストア主義は、宗教との関係では理神論的立場をとる。すなわち、それは神を唯一の絶対的創造神とするが、神の役割をあくまでそれだけにとどめる。リブシウスはその創造神を彼岸にとどめつつ、この世のことを人間理性の支配に委ねようとする。そのために、「摂理」、「必然」、「運命」が語られる。

「摂理」は神の配慮であり、宇宙の森羅万象を統べる。しかし、この「摂理」はあくまで神の下にとどまり、宇宙の直接的支配は「必然」に委ねられる。「必然」とは、「摂理の確固とした強制力であり、不変の力である。」この「必然」には「自然的摂理」と「運命的必然」がある。「自然的必然」とはすべてのものはいつか必ず滅亡するというものだが、「運命的必然」とは事件や人間の行動を規定する「運命」の必然である。

リブシウスは「真の運命」を「摂理の永遠の決定」と呼ぶ。しかし、これは「運命」

と「摂理」を同一視するものではない。「摂理は神の内部にあり、神にのみ帰せられる。運命は事物の中であって、事物に帰せられる」からである。神は彼岸にとどまり、この世のことは「運命」の定めによる。しかも、この運命は地上ではあくまで第一因であって、人間の自由意志をも含む中間因・第二因を排除しない。人間は自由意志をもち、自己の判断で行為し、運命に従う。「人間を駆り立てるものは神ではなく、自分自身なのである。」それ故、人はその自分自身の力で運命と合体しなければならない。運命とは「結果としての必然」であって、その結果を生み出すのは自由意志を有する人間だからである。なぜなら、「必然と運命の厳しい法則が課するすべてに耐えるのは、低能であって服従ではない」からである。ボルケナウが言うように、「恒心」においては「無感動」ということだけが重要なのである。つまり「恒心」ということが表明されるのは、どんな感動的な拘束も行動の事実適合性（ザッハリッヒカイト）をそこなうものではない、という点においてである。意志の自由は本来この点にある。」（『封建的世界像から市民的世界像へ』）

『恒心論』の人間＝世界観を貫くのは、実は政治的合理主義である。感動に動かされない、理性的な人間と世界がその理想である。したがって、新ストア主義は、無秩序な暴力と情念のぼっこする世界を秩序ある理性的なものに変革せんとする。それは、人間を情念の虜から理性的戦士へと変え、次いで国家をアナーキーな分散的権力構造体から紀律化された権威的秩序へと改造せんとする。リブシウスはその見取図を『政治学』で描き出すことになる。

### 第三部 新ストア主義の国家思想

#### 第一章 ラムス主義とリブシウスの『政治学』

リブシウスの『政治学』は 16・7 世紀のベストセラーであった。それは時代の要請に方法の上でも内容の面でも最も良く適合していた。それは、まず何よりも反ケロ的な革新的文体とその表現方法であるアフォリズムを採っていた。さらにそれは、当時最も先進的で破壊的な、ラムスの論理学を採用していた。『政治学』はラムスの二分法によって記述され、そのために非常に先駆的な装を有した。「政治学は方法的となり、より狭い意味での政治科学が生まれた。その近代教科書、政治行動の理論、統治理論および統政技術の教本がリブシウスの『政治学』だったのである。」（ギュンター・アーベル）

#### 第二章 国家理性

『政治学』は、初期近代における政治的合理主義の先駆的表現である。これは、なるほど依然として中世的国家目的である「公共善」を最高善とするが、彼の「公共善」はもはや旧ヨーロッパ的な共通善の要素を含まない。つまり、それは「人間的生存の条件としての、共通の、すべての人間に関わる安寧」ではなく、「国民の安寧もしくは政治制度としての国家の安寧」を意味した。リブシウスは公共善を国家的安全と等置し、何よりも国家全体の安寧を優先した。彼は個人的情念の発現を規制し、理性的な公共つまり公的秩序を維持することを重視する。命令・服従の秩序の形成と維持が最優先の課題となる。そのための「必要」は道徳をも破る。「必要は……すべての法律を破る。」(セネカ)この意味において、リブシウスは国家理性の理念の信奉者であった。

### 第三章 宗教的寛容—政治的叡知(1)

初期近代ヨーロッパの主要問題の一つは宗教であり、宗派的あつれきであった。『政治学』は、宗教戦争という「不和のたいまつ」が燃え盛るのを前にして、その解決方法を示す。その解答とは、君主に宗教の内容そのものへの介入を認めないが外的な監督を認める、というものである。したがって、彼は信教の自由を認めない。彼の考えでは、それはむしろ混乱の源泉でしかないからである。しかし、彼は寛容の徒であった。なぜなら、彼は、国教に従わない者たちを「公に誤る人々」と「私的に誤る人々」とに分け、騒乱を起こす前者だけを罰し、後者を放置するように主張したからである。彼にとって重要なのは教義そのものではない。合理的な秩序、合理的な命令・服従の秩序を完成することだった。そのために彼は宗教的情念の突出を抑制しつつ、しかも私的な次元では信仰を自由に委せた。これは、すべての信仰に無差別の自由を与えはしないが、私的に信じ静かにしていることを許した。むしろ、合理的秩序を形成するためである。リブシウスの宗教的寛容は政治的叡知の一分岐なのである。

### 第四章 権威的支配—政治的叡知(2)

新ストア主義の基本的倫理は「恒心」・「忍耐」・「服従」である。この倫理が新ストア主義の国家、「確たる命令・服従の秩序」を内面的に支える。新ストア主義においては理性が情念を支配する。したがって、国家においても理性的支配者が情念に捉われた民衆を支配し、規律化しなければならない。リブシウスはそれ故、支配者に民衆の情念を規制・操作するように求める。支配者が留意すべきは、民衆に「好意」と「権威」の情念を抱かせ、「憎悪」と「輕蔑」の情念を持たせないようにすることである。彼はとりわけ、「国王とその地位に関して、臣民さらに外国人が感ずる尊敬の念」である「権威」

を重視し、その必要性を強調する。「まさに権威に依らないで誰が統治できるであろうか。『統治する力は服従する者の同意のうちに存する』(リヴィウス)」と。さらに彼は、「権威」と反対の情念、「国王とその地位に対する、臣民の強硬な害意および立腹」である「憎悪」についても詳論し、それを避けるように勧める。とくに、「憎悪」を招きやすいが非常に大切な、租税と監察＝風紀の取締に論及し、初期近代国家に特有の学問、官房学と行政学(ポリツアイ)の先駆を為す。彼は、戦争ひいては国家のために租税が必要であることを説き、国家の管理のために民衆を監察することを求めた。彼はそうすることによって民衆の紀律化を求めたのである。

### 第五章 官僚制

新ストア主義の紀律化は、ただ民衆に対してのみ求められるわけではない。『恒心論』は広い意味における統治者層に自己紀律を求めていた。そして、『政治学』は人間の紀律化とともに制度の紀律化を要請した。すなわち、官僚機構と軍事機構の紀律化を要請したのである。

官僚機構について、リブシウスは参議官と行政官とを厳密に分けた。参議官は君主の顧問であり、君主を知的に支える。そして参議官はあくまで公的な存在でなくてはならない。「宮廷の召使いの秘密の助言」は退けられる。「彼らは私事に関して君主に仕える者であって、国家の職務に従事しているのでも、国事に携わっているのでもない。」同様に、行政官も公的に君主の手足となるそれと私的に君主に仕える宮内官とに分かれる。リブシウスがとりたてて問題にするのは、「支配もしくは国家の事柄に部分的に関わる」公的行政官であり、その最重要の規則を「服従」のうちにみる。彼らは君主に服従し、「国家と国民のために」働く。ここにみられるのは、「官僚の精神の原型」すなわち、「服従、定型、形式主義、非情、……メカニクな勤務の精神」(ヒンツェ)である。

### 第六章 常備軍—軍事的教知(1)

新ストア的な紀律化の理念は軍事の分野にも及ぶ。封建的軍事体制が無力化していた16世紀には、傭兵隊が軍事力の中核をなしていた。しかし、傭兵は不誠実で、不服従、国民に対して危険である。リブシウスはこの観点から、傭兵に代って国民軍の創設を求めた。彼は、古代ローマ軍を範として紀律正しい国民軍を形成せんとしたのである。そのための手段は二つある。選抜と紀律である。

選抜は兵士を「臣民から選抜すること」である。これはまた正規兵と予備兵について行われる。この正規兵こそ、「常備軍*miles perpetuus*」として初期近代国家の軍事力の

中核を構成するものである。さらに、臣民から成る「兵士を強くしかも有徳な者へと厳しく鍛えあげる」ために紀律が要請された。紀律は訓練、秩序、抑制、模範からなる。兵士は、この紀律によって、かつての無頼の徒から新ストア的な倫理を有する真の服従者となる。暴虐と逃亡に長けた傭兵から、死への恐怖すら克服する兵士、黙して服従し、命令に従って機動的に行動する兵士となる。この兵士を的確に動かすのは理性的に判断・命令する指揮官、恒心を有する指揮官である。全軍隊がここに機構化され、組織的に戦いが貫徹される。君主、官僚、軍隊が、「義務の遂行、克己、節度、節制、敬虔というストア的な命令、さらにまた『恒心』という戦闘的なモラル、その生のエネルギーと精神の強さ、要するに倫理によると同時に理性に統御された躍動的力」(エストライヒ)を体現することになった。軍事の問題は軍事の領域を越えて、国家の問題となる。軍事は国家化し、国家もまた軍事化する。

#### 第七章 戦争と平和—軍事的叡知(2)

新ストア主義の国家目的は「公共善」であり、統治とは「命令・服従の秩序」を意味した。したがって、「公共善」が国家的安全と同義である限り、国家的軍隊の目的はあくまで平和にある。しかし、組織化され紀律化された軍隊を擁する国家は、実力による平和を求める。「『平和を享受しようと望むなら、戦争を行わなくてはならない。』(キケロ)」さもなければ、「何かつまらない動物のようなもの」とみなされてしまうであろう。それ故、新ストア主義の国家は対内的に紀律化され、対外的に自己主張する存在である。それはまた制度的に強力であるだけでなく、臣民の情念を合理的に管理し、彼らを戦争へと駆り立てる。黙して命令に服すること、これこそ新ストア的な倫理であり、真に男性的な徳である。国家は、ここに強大な権力構造とそれに見合った精神構造=新ストア的人間を獲得する。新ストア主義において、国家は強力な権力と軍事力、さらにその双方に内面的に従い、戦うことを辞さない人間集団を有する、マルスのリヴァイアサンとなったのである。

#### 結び 合理的紀律化と初期近代ヨーロッパ

イギリスの歴史家マイケル・ロバーツによれば、初期近代に始まるある歴史現象が近代ヨーロッパの進路を運命的に定めたという。それはヨーロッパ全域で展開された軍制改革であり、その重要性の故に軍事革命と呼ばれる。この革命は、オラニエのマウリッツを中心とするオランダ共和国軍の軍制改革とともに始まる。その主要な特徴は高度の

紀律であり、それを前提とした精密な軍隊運動であった。この点に、軍事革命と新ストア主義の接点がある。マウリッツ等の改革の推進者たちは主に古典に依拠してこれを推進したが、その中にリプシウスの著作も存在したからである。彼らは厳しい訓練を恒常的に兵士に施したが、その背景には新ストア的な紀律の理念が存した。そして、この改革は直ちにスウェーデン、ドイツ、フランス、イギリス等ヨーロッパ全域に拡まっていた。

しかし、軍事革命は初期近代ヨーロッパにおける全体的構造変化の一関数にすぎない。マックス・ウェーバーによれば、近代的戦闘に「最初に転換をもたらしたのは火薬ではなく、紀律だった。」そして、この「軍事的紀律」が「近代資本主義的工場の理想的モデル」となった。政治・経済的要請の合理化と紀律化は歩を同じくして進む。「諸々の個人的行為を退ける、あのありとあらゆる力の中で最も抗し難いのは、個人的カリスマや身分的名誉に立脚地をもつ立場を或いは根絶するか、或いは合理的に改造する力、つまり合理的紀律である。」(ウェーバー)

新ストア主義は、情念に囚われず理性に従う人間、服従し耐えることのできる人間と命令・服従の秩序としての国家、対外的に力によって自己主張し得る国家の青写真を提供した。それ故に、新ストア主義は、初期近代ヨーロッパの下で始まりつつあった、人間と国家の紀律化と推進した。新ストア主義とりわけその国家哲学は、近代ヨーロッパを準備する一礎石となったのである。

## 2. 本論文の評価

(1) これまでヨーロッパにおける中世的国制の近代的国家形体への移行過程については、家産制国家における装置の集中化ないし合理化に関する制度史的及び事実史的な叙述が主流となっており、19世紀以来の政治学や法実証主義的国家学も、近代国家の成立を当然の前提と考え、近代国家の成立に際しての、人間の精神的駆動力に関心を持つ者は極めて少なかった。僅かにエストライヒやアーベルが、絶対主義国家と新ストア主義に着目したにとどまり、前者は社会的紀律化の概念を提示したが詳細な検討を残して他界している。

山内氏はこのエストライヒの着想をもとに、国家構造の変化と人間精神構造の変化との連関という広い視野に立ち、近代国家の成立と新ストア主義の、つまりリプシウスの実践的国家哲学とは密接に関連があることを論証するに至っている。

すなわち情念を抑制して理性的に行動する支配者が、紀律化された制度(官僚制・軍

制)のもと、命令・服従関係を貫徹し、そして暴力を独占し、もって国内平和を保障する公共善としての国家を創ること、いいかえれば恒心・忍耐・服従という新ストア主義の倫理によって内面的に支えられた統治形態を実現することが、リブシウスの説く理想的国家像であり、それこそが近代国家の内実にはかならない。山内氏はそれと情念・暴力が支配するアナルヒー的な中世の状態と明確な対置関係を鮮明に描き出している。さらに山内氏は、エリアスの提示した「文明化の過程」というシェーマに、リブシウスの国家哲学という具体的な要素を組み込むことにも成功している。

このようにこの論文はヨーロッパ近代国家に関する非常にスケールの大きな考察であり、その巧みな構成ともあいまって説得力に富む論考となっている。

(2) 分析の過程において、山内氏は、人文主義者特有の難解なアフォリズム(箴言集)の形式をとるリブシウスの著作につき、数版にわたって綿密な渉猟を行っており、また内容の理解にあたって、多くのキーワード(例えば公共善)についても、啓示主義的な意義と新ストアの理神論的な意義とを混同することなく、的確に区別しており、論述に対して十分な信頼感を与えている。

(3) この論考は、リブシウス研究として、現在までのところ世界での初めての体系的な業績であり、その点でも学界に寄与するところ極めて大である。

このように山内氏の研究は非常にすぐれたものであり問題点は余りないように見受けられる。望蜀の感もなくはないが、以下の2点を指摘しておく。

情念・暴力の支配した時代といわれる中世においても存在していた神の平和あるいは良き統治(Guto Polizei)などの平和団体形成のためのエートスが、決定的な実効性を持つに至らなかった理由について、立ち入った論述があれば、本論文の説得力はいや増したことであろう。また慣用的に用いられている「新ストア」という用語について「古代ストア」との関係の概念上の整理の必要があったのではないかと思考するものである。

### 3. 結論

以上のような論文の評価と語学試験を含む口述試験の結果に基づき、審査員一同は、山内進氏に対し、一橋大学法学博士の学位を授与するのが適当であると判断した。

1987年3月11日